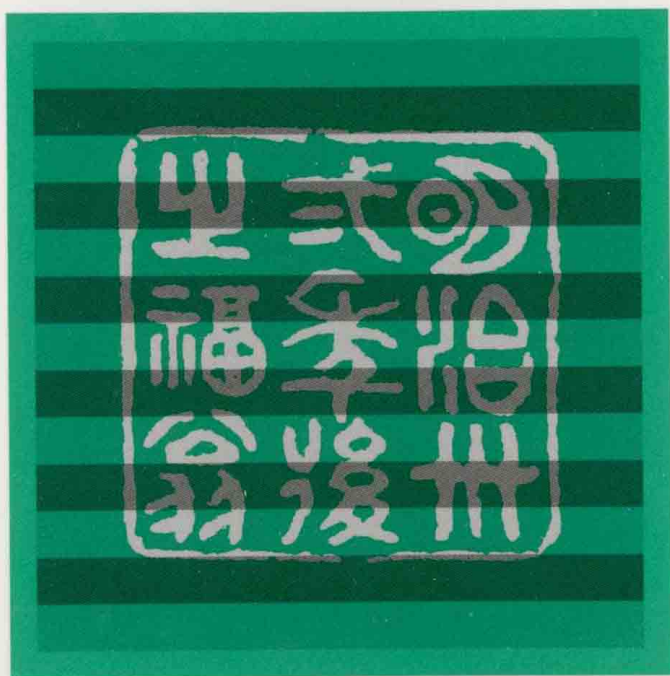


中村敏子

福沢諭吉 文明と社会構想



創文社 現代自由学芸叢書

福沢諭吉 文明と社会構想

中村敏子



創文社

中村 敏子 (なかむら・としこ)

1952年宇都宮市に生れる。1975年東京大学法学部卒業。1975年—1978年東京都庁勤務。1985年北海道大学大学院法学研究科修士課程終了。1988年同博士後期課程単位取得退学。1988年—1994年北海道大学法学部助手。1990年—1992年オックスフォード大学日産日本研究所客員研究員。1994年北海学園大学助教授。現在は、北海学園大学法学部教授。法学博士。
編著：『福沢論吉家族論集』（岩波文庫、1999年）

〔福沢論吉 文明と社会構想〕

現代自由学芸叢書

（著者との申し合せにより検印省略）

精興社印刷・徳住製本

二〇〇〇年一月一日 第一刷印刷 二〇〇〇年一月三日 第一刷発行	著者 中村 敏子	発行者 久保井 浩俊	印刷者 山田 隆	発行所 株式会社 創文社	〒113-0033 東京都千代田区麴町二一六―七 電話 〇三三三六三七一〇一 振替 〇〇二二〇〇九二四七二
--	----------	------------	----------	-----------------	--

ISBN 4-423-73096-0

Printed in Japan

序

本書は、福沢諭吉の思想について論じているが、私が意図しているのは、福沢を理解するだけではなく、現実のなかで彼の思想を生かすことである。それは、私自身が、女性であることにより感じていた生きにくさを解決するために、政治思想の研究を始めたことと深く関わっている。

私は、大学を卒業するまでは、それほど女性としてのハンディを意識せずに過ごしていた。しかし、就職という状況にたち至って、初めて自分が女性であることで、否応なしの差別がふりかかることを経験した。そして、それをただただ理不尽だと感じた私は、法的には男女の差別がないはずである公務員という職業を選択した。しかしそれでも、実際の仕事の分担やお茶くみなどで、女性を差別する構造は存在した。女性が女性であるという事実の前には、試験も法も無力なのだ。これが、私が仕事につく中で悟ったことであった。

私が大学に入学した一九七〇年代は、フェミニズムの全盛時代であり、私もその中で育った。フェミニズムの方向は、ヘジエンダーンという概念により、女性が女性であることから受ける差別を問い直し、男女の枠をなくしていくとするものであった。私は、現実の差別に直面するなかで、やはり、家族において女性が果たしている役割が問題なのではないかと考えた。そこが変わらないかぎり、社会において女性がこうむる差別はなくならないだろう。一方でそのように考えながらも、女性であることが変えられないとしたら、男女の枠を突破するという方法が、

へ女性である」という事実による差別をなくすために本当に有効なのかという疑問が、私の心の底に常に存在することになった。

結局私は結婚を機に仕事を止め、夫とともにイギリスの大学町に行った。当時のイギリスはフェミニズムの運動が成熟期を迎えており、大学においても、女性の問題を考える自主ゼミが開講されていた。私は当時専業主婦だったが、イギリスの友人が、「誰もあなたに質問したりしないから大丈夫よ」と、ゼミに参加することをすすめてくれた。教室は熱気にあふれ、学生ではない人々もたくさん参加して、女性の問題がさまざまな視点から検討されていた。このような空気に触発され、私は帰国後、イギリスで生まれた長女を保育園に預け、大学院に入学した。そこで本格的に女性の問題を考えたいと思ったのである。

その中で出会ったのが福沢諭吉である。福沢の専門家である松沢弘陽教授が、私だけのために、明治期の女性論に関するゼミを開き、さまざまな人の女性論に触れる機会を提供してくださったのだが、なかでも引き付けられたのが福沢の議論であった。理由はわからなかったのだが、彼の議論を読み、私は、「福沢は本物だ」と感じた。それは、人権論や欧米のフェミニズムも含めて、それまで私が接してきた議論のどれにも感じたことのない感覚であった。そして、博士論文のテーマに福沢を選び、彼のどこが本物なのかを考えることにした。

私の仮説は次のようなものであった。福沢は、女性に関して数多くの著作を残している。また、西洋の思想を日本に導入するために奮闘した人物であるというのが通説である。それならば、彼は、西洋の近代社会の基本となっている個人主義を、男女間や家族における関係にまで貫徹させようとしたのではないか。それが、数ある女性論のなかでも、彼を本物だと感じさせる所以なのではなからうか。こうして私の福沢研究が始まった。

私は、まず福沢の著作に関する通史的な分析を行なった後、彼の個人主義の思想が家族にまで貫徹しているとい

う仮説を、しっかりと立証する必要があると考えた。ただ漠然と西洋との類似や相違を語るのではなく、どこがどのように同じなのかを明確にしたかったからである。

ちょうどその頃、幸いにして私は、偶然それにふさわしい本に出会うことができた。それは、ケンブリッジ大学のアラン・マクファアレンが著した『イングランドにおける結婚と愛』⁽¹⁾という著作であった。マクファアレンは、それより先に『イングランドの個人主義の起源』⁽²⁾を著して、世界に先駆けて発達したイングランドの資本主義は、経済構造だけの問題ではなく、社会全体の構造と密接に絡み合って発展したと主張した。彼はそれを「資本主義の文化」⁽³⁾と呼ぶが、その文化を成立させたのはイングランドの「個人主義」であり、なかでも家族の構造が重要であると論じたのである。そして彼は、『イングランドにおける結婚と愛』において、イングランドの家族をモデルとして提示していた。

そこで私は、そのモデルを使い、福沢の思想のなかの家族像と比較を試みた。その結果、当初の私の予想に反して、福沢の思想は、いくつかの点でイングランドモデルと異なることがわかったのである。

このように福沢の思想をイギリスの家族構造と比較し、内容を検討する作業を行なっている最中に、マクファアレン教授を私の在籍していた大学に迎えることができた。教授の滞在中に彼の研究の手伝いをする中で、私はイングランドの個人主義について多くのことを教えられ、また、必ず現場にいて自分の目で確かめるという彼の研究の手法を、間近で学ぶことができた。

その直後に私は、イギリスに二年間滞在する機会を与えられた。前回の滞在では長女を出産し、妊娠中から出産、初期の子育ての方法まで、日本とはかなり違っていることを経験したが、今回は三人の子連れであった。三人の子供を通して、幼児から中学生に至るまでの子供達とその親子関係を間近に見ることで、私は、イギリス人の家族観

は日本人と全く異なることを体験したのである。

マクファーレンの説を学んだ上でイギリスに滞在するに際して、私が抱いていた仮説は次のようなものであった。すなわち、いくつかの点では異なるにしても、福沢は、マクファーレンの主張したような個人主義に基づく「資本主義の文化」という問題に気付いており、社会全体を見渡した上で、個人主義的な家族構造を主張し、女性を個人として認めたのであろうというものである。

ところが実際にイギリスで暮らすなかでわかったのは、「個人主義」というものが、私たちには想像できないくらい厳しいものだということであった。「個人主義」とは、日本でよくいわれる〈個性〉や〈個人の権利〉を尊重するなどという口当たりのいい内容ではなく、「誰にも頼らないで本当のひとりで生きていく」という意味なのである。「誰にも頼らない」とは、親も兄弟も他人であり、あてにできないという前提に立っている。

「ひとりで生きていく」ということは、自分で全てを判断し行動することを意味するから、それができない人は、誰かが監督しなければならない。日本とイギリスとの比較において感じた最も一般的な違いは、大人と子供という社会的な区分の仕方だった。イギリス人は、子供と大人の境界をきちんと定め、不完全な状態にある子供は大人が監督責任を負うと考えているようである。日本人は、子供の成長を緩やかなプロセスのなかで考え、子供から大人への成長は、ある程度の時間をかけて、不完全な部分を発達させていくことであると考える。そして、その過程を見守りながら、助言し、導くことが大人の仕事だと考えるであろう。

イギリスに行って間もなく、なかなか新しい環境に馴れなかった六歳になる一番下の娘が、珍しく学校のそばのお店に自分だけで消しゴムを買いに行くという。私は、よい訓練になるだろうと考え、お金を持たせて出したのだが、しばらくして、半べそをかきながら、お店の人が売ってくれなかったと言って戻ってきた。英語がわからな

ったのかと思い、今度は夫と一緒にいくと、ちょうど同級生のお母さんが居て、子供はひとりで買物ができないと、法律で決まっているのだと教えてくれた。

また、自転車で通学していた上の娘達が、家の前の道路を斜めに横切ってくると、向かいにすむ老婦人が、「あんなふうに横切ると危ないわ。子供たちにちゃんと行ってね」と私に注意してくれた。このように、子供はひとりでは判断できないと考えられているから、小学校などは家から五分ほどの距離にあり、歩道も整備されている道を歩いてくるだけなのだが、必ず親が送り迎えをしなければいけないことになっていた。また、子供同士が遊ぶときも、親が送迎の相談をすることが普通であった。

このような子供と大人の境目は、義務教育が終わる一五歳と考えられているようである。それまでは、大人が見上げるような大きな体になっても、電車の料金なども子供で通用するのだから、とてもおかしい気がしたものだ。

イギリス人のこのような子供観は、家族のなかの親子関係にも反映している。親が子供を扶養すべき期間は、義務教育が終わるまでと考えられているらしい。高校へ進学する子供の少ないイギリスでは、一五歳になると家から追い出されることもあると聞いた。それはすなわち、親の監督すべき期間の終了を意味するから、一五歳を過ぎると、子供が夜中に外出しようが、友達の家に外泊しようが、親は放っておくらしい。夜の食事にも大人と子供は違うという考えが現われている。はっきり確かめたわけではないが、ミドルクラスの人々はかなり遅い時間帯に食事をするので、子供は別に簡単な食事を早い時間に済ませるようであった。さらに、家庭において子供の虐待の多いことには驚かされた。性的虐待もかなりの数に上っているようで、心を暗くさせられることであった。

このようなイギリスの状況を見て、私は、親がこんな風でも子供はちゃんと育つのだと、母親としての重荷が軽くなる感じがしたほどである。日本に比べて親の重荷が軽いということは、それだけ子供の負担が大きいというこ

とであろう。イギリスの子供たちは、一五歳になるといきなり大人になることを求められるため、中学生になると急に大人びて、必死で大人の仲間入りをしようとする。しかし、いきなり大人になるのはそう簡単ではない。大人の保護のもと、何年もかかって大人になるプロセスを歩んでいける日本の子供たちに比べて、彼らはとても痛々しい。欧米において、思春期が重大な問題をはらむものとして扱われるのは、このような状況があるからであろう。

また、夫の妻に対する暴力の問題も頻繁に報道されていた。当時の私は、日本であれば実家に帰ることになるのだろうと考えたが、親子の関係が先に述べたようなクールなものであれば、そのようにはならないのである。そこで、女性のためのシェルターが必要になる。また、「ベター・ハーフ」と考えられる夫婦の関係でも、たとえば銀行の口座が夫名義であれば、夫が自分でサインをしなければお金を引き出すこともままならない。通帳と印鑑を管理する妻が、夫名義の口座を財布代わりにしている日本の状況からみれば、不便この上ないのである。

マクファーレンによれば、「個人主義」とはすなわち、個々人が自分のまわりに城壁を築いて、その中には誰も入れずに自分を守ることであり、その唯一の例外が夫婦関係だということである。また、親子であっても、それぞれが城壁を築いているのは同様で、その関係は、友達と同様、気が合えば付き合うし、気が合わなければ付き合わないというものだという。そして、ひとりで自分を守らなければならない孤独な個人が、唯一の武器としてもっているのが「権利」なのである。個々人の集合である社会は、それを相互に尊重することで成立し得るというのである。こうして早くから「個人」としてひとりで生き、自分の権利を主張するために、子供たちは、言葉で自分を主張する技を小さなうちから学ぶ。イギリスの学校では、詩の朗読、弁論大会、討論、ドラマの学習などが行なわれ、発表の機会が頻繁に与えられていた。

私は、自由や平等を大切に思い、そのような権利が夫婦や親子の間でも認められるべきだと考え、自分ではそれ

序	i
---	---

第一章 『文明論之概略』と文明化の道	三
--------------------	---

第一節 基本的人間像と社会契約論	四
------------------	---

第二節 『文明論之概略』における転換	八
--------------------	---

第三節 日本の独立と文明化の戦略	二七
------------------	----

第四節 非合理的な「情」と外向きの国権論	三五
----------------------	----

第五節 文明史の原理の再確認	四三
----------------	----

第六節 立論の転換	四七
-----------	----

第七節 学者と経世家への分裂	五五
----------------	----

第二章 文明化のなかの女性と男性	六七
------------------	----

第一節 文明化における女性のあるべき姿	六九
---------------------	----

第二節 男性の品行に関する現状改革論	七七
--------------------	----

第三節 男女交際のあるべき姿とその方便	九三
---------------------	----

第四節 人間のあるべき姿と人間関係の原理論	一〇一
-----------------------	-----

第五節 近代化のなかの家族	一二〇
---------------	-----

序	i
---	---

第一章 『文明論之概略』と文明化の道	三
--------------------	---

第一節 基本的人間像と社会契約論	四
------------------	---

第二節 『文明論之概略』における転換	八
--------------------	---

第三節 日本の独立と文明化の戦略	二七
------------------	----

第四節 非合理的な「情」と外向きの国権論	三五
----------------------	----

第五節 文明史の原理の再確認	四三
----------------	----

第六節 立論の転換	四七
-----------	----

第七節 学者と経世家への分裂	五五
----------------	----

第二章 文明化のなかの女性と男性	五七
------------------	----

第一節 文明化における女性のあるべき姿	六九
---------------------	----

第二節 男性の品行に関する現状改革論	七七
--------------------	----

第三節 男女交際のあるべき姿とその方便	八二
---------------------	----

第四節 人間のあるべき姿と人間関係の原理論	一一〇
-----------------------	-----

第五節 近代化のなかの家族	一二〇
---------------	-----

序	1
---	---

第一章 『文明論之概略』と文明化の道	3
--------------------	---

第一節 基本的人間像と社会契約論	4
------------------	---

第二節 『文明論之概略』における転換	8
--------------------	---

第三節 日本の独立と文明化の戦略	27
------------------	----

第四節 非合理的な「情」と外向きの国権論	35
----------------------	----

第五節 文明史の原理の再確認	39
----------------	----

第六節 立論の転換	47
-----------	----

第七節 学者と経世家への分裂	55
----------------	----

第二章 文明化のなかの女性と男性	70
------------------	----

第一節 文明化における女性のあるべき姿	76
---------------------	----

第二節 男性の品行に関する現状改革論	77
--------------------	----

第三節 男女交際のあるべき姿とその方便	82
---------------------	----

第四節 人間のあるべき姿と人間関係の原理論	102
-----------------------	-----

第五節 近代化のなかの家族	130
---------------	-----

凡 例

- 一、本文中に「」で囲んだ語句は、福沢およびその他の著者の著作から直接引用した語句であり、へんにより囲まれた語句は、筆者が考察のために重要だと考えた語句を示す。
- 二、福沢の著作からの引用文に付された括弧内の数字は、『福沢諭吉全集』における巻と頁を表す。たとえば、(二―二三五)とあれば、第二巻の二三五頁を示している。
- 三、福沢の著作からの引用文は、読みやすいように、現代かなづかいに直したが、題名に関しては「ひどのをしへ」「読倫理教科書」を除いてそのままとした。
- 四、引用文中の読みにくい語には、福沢自身のふりがなを再現するとともに、適宜新たなふりがなを付した。福沢自身がカタカナで付した部分も、そのまま再現した。
- 五、引用文中の旧漢字は、基本的には新しい字体に改めた。また、送りがなも、読みやすいように適宜改め、句読点も補った。
- 六、福沢が、同音の当字を用いている言葉には、その語に続いて「」で本来の漢字を示した。

目

次——福沢諭吉 文明と社会構想

序	i
---	---

第一章 『文明論之概略』と文明化の道	三
--------------------	---

第一節 基本的人間像と社会契約論	四
------------------	---

第二節 『文明論之概略』における転換	八
--------------------	---

第三節 日本の独立と文明化の戦略	二七
------------------	----

第四節 非合理的な「情」と外向きの国権論	三五
----------------------	----

第五節 文明史の原理の再確認	四三
----------------	----

第六節 立論の転換	四七
-----------	----

第七節 学者と経世家への分裂	五五
----------------	----

第二章 文明化のなかの女性と男性	六七
------------------	----

第一節 文明化における女性のあるべき姿	六九
---------------------	----

第二節 男性の品行に関する現状改革論	七七
--------------------	----

第三節 男女交際のあるべき姿とその方便	八三
---------------------	----

第四節 人間のあるべき姿と人間関係の原理論	一〇一
-----------------------	-----

第五節 近代化のなかの家族	一三〇
---------------	-----

第三章 文明における個人と家族	三三
第一節 西洋文明化における女性と家族	三四
一 独立した〈個人〉の権利と女性	三四
二 女性をめぐる家族内の人間関係	三七
第二節 近代を超える福沢諭吉の思想	一四
一 福沢の社会構想と家族	一四
二 近代政治理論の到達点	一六
三 福沢の社会構想の意味	一七
注	一七
あとがき	一七
文献リスト	七 11
索引(事項・書名)	1 6

福沢諭吉 文明と社会構想